出　藍　文　庫

「四畳半の二十四節気」

2-1

近藤貴弥 著

一　南瓜（かぼちゃ）

原稿用紙にブルーブラックのインクが走り、一字、また一字と綴られていく。けれども、物語はまだ何も始まっていない。幾つもの始まりが紡がれ、紡がれたかと思えば二重線を引かれ、消されていく。

そんなことを、日の高い時分からずっと続けている。冷たい陽の光が、四畳半の書斎に備えられた横長の窓から降り注ぐ。庭の様子を座ってでも見えるようにしたが、今では、細い枝が震えるのしか見えなかった。お陰で、原稿に集中できる。集中できるのだが、一つも掛けそうにない。

寒さで震える老いた身体に褞袍を引っ掛け、一字、一句……。万年筆を握る指先に痛みを覚え、目も霞むようになり、ようやく顔を上げた。

目も指も肩も首も腰も、とっくに疲労困憊だった。疲れ切った身体を労るように長い息を吐いた。その息のどこかには後悔や老いを認めざるを得ない悲しみも混じっていた。

昔はもっと文章を書いても疲れなかったのだが、今ではもう、すぐに音を上げてしまう。書斎はいつの間にか、数日前から引きずっている重たい空気で満たされていた。

この書斎に疲労を癒やすものはない。火鉢は居間にあり、布団は寝床の押入れにしまっている。風呂も書斎から遠い。畳には書籍や新聞が散らばり、押入れを開けるのすら一苦労だ。

空気を入れ替えようと立ち上がろうとするが、膝が痛み、文机の前に腰を下ろした。いつ用意したのか思い出せない煎茶が、文机の端に置いてあった。一口飲んでみると、もう冷たくなっていた。苦い。

一息ついた息が白かった。書斎はそれほどまでに冷えているのだろうか。ゆっくりと立ち上がり、窓の向こうに目を遣ると驚いた。濃藍の夜空が広がり、見上げると、細く暗い月が東の空にある。

それほど深い時間になっているとは思わなかった。時間が分かると部屋も随分と暗くなっ

ていた。部屋の端に人影が見えるような気がしたが、夜のせいだろう。

書斎に時計の一つでも置いた方がいいのかもしれないが、秒針の単調な音で度々仕事の邪魔をされ、書斎に持ち込んでいない。しかし、このままでは新聞社が提示した〆切を破ってしまう可能性がある。好悪で済む話ではない。

友人諸氏のように速筆であればこのような悩みを懐かなくても済むのだが、私は何とか〆切に間に合わせている、という程度だ。〆切の前日、前々日に完成原稿ができているようにする。

当然、今回の原稿もそのつもりなのだが、手間取っている。書き出しが上手くいかない。書き出しが上手くいかないと全てが書けない。世の中には、書き出しから書かずに自分の好きなところから書き進め、後から書き出しや終わりに向けて調整をかける者もいるようだが、私はそういうことができない人間だった。

一眠りすれば、頭が切り替わり、明日になれば、原稿も書き進められるようになるだろうか。畳に寝転ぼうとした時、行灯のぼんやりとした明かりの向こうから、小さな影が伸びて

いるのが見えた。

小柄な少女が外套に身を包ませ、更に小さくなっている。マフラーと外套の高い襟に白い顔を埋めている。帽子を深く被り、青い瞳を隙間から覗かせている。

姪の姿は呆れ返って、寝転んだまま微笑した。浦風は微かに両眉を寄せ、白い息を吐いて答える。

「なんて恰好をしているんだい、浦風」

「ぶち寒いじゃけぇ」

「私はそんなことないよ」

「そんだけ着てたら暖かいじゃろぉ……」

袷に褞袍、分厚い足袋で書斎に籠っている私を、浦風は羨ましそうに見上げる。仕事に再び取り掛かろうと身体を起こし、浦風に背を向けると、手厳しい声が飛んできた。

「センセ、さっきからそればっかじゃの？」

「それ？」

「書いては消して、消しては書いて……今日はそういう日なんじゃろ。割り切って、息抜きでもどうじゃ？　息抜き、大切なことやと思うじゃがのぅ、うちは」
「そうとも言ってならられない状況なんだよ」
原稿用紙にぐっと顔を近づけ、昼と同じように書き始めようとするが、続きは思い浮かばない。浦風が言うように、今日は書けない日と割り切った方が良いのかもしれない。しかし、そう割り切ったところで、明日は書けるという保証はどこにもない。
弱気になった途端、浦風の言葉の端々から甘い香りが漂ってくる。
「顔も酷いし、疲れてとるじゃって」
「ゆっくり？」
「そそ、もうお仕事のことなんか忘れて、ゆっくり」
私の返事を待たずに、浦風は外套やマフラーや帽子を脱いだ。浦風はセーラー服のままだった。
「お前……学校は？」

「もうとっくに終わっとるんじゃが？」
「いや、それは分かっているよ？」
「どうしたんじゃ、センセ？」
浦風は適当に私をあしらうと押入れの前の書籍や雑誌を端に寄せ、中から小さい炬燵を引っ引っ張り出す。埃が舞い、私達は共に二三咳を零した。浦風は私の横に立ち、窓を開ける。文机に片手をつき、細い爪先を伸ばし、腕を伸ばす。窓まで容易に手が届いた。少し前まで届かった覚えがあるのだが、随分と大きくなったようだ。
頬に自然と微笑が浮かぶ。
「……大きくなったねぇ」
浦風の白い横顔が赤みを帯びていた。品の良い唇が微かに動いたが、声にならない。私は何も聞き返さず、何とも答えず、書きかけの原稿用紙が書斎を舞うのを目で追った。
冷たい夜風が、書斎の淀んだ空気を吹き飛ばす。重い腰を上げ、原稿用紙を拾い上げると、夜風が裾や袂の隙間から忍び込んできた。堪らず身体が震え上がった。

「……冷えるねぇ」
「じゃろ？」
「ご飯でも用意しようか」
微笑する浦風に、窓を閉めるように指で合図して、障子を開けると、醤油の香りが鼻先を掠めた。掠めたのと同時に、腹が鳴る。今日、台所に向かった覚えはない。窓を閉め、跳ねるように廊下に出てきた浦風の小さな頭を見下ろす。学校が終わったと言っていたが、ならば何故制服のままここに居るのだろうか。私の訝しむような視線に気付いたのか、浦風は私の顔色を伺うように見上げ、弁明する。
「冬休みじゃけぇ……。おとんには言うてあるんじゃ……」
「お前の家ではないよ」
「声かけたんじゃがのぅ？」
「いつ？」
「お昼」

「私は何と？」
「んー、って。やし……」
「記憶にないなぁ」
「ずるい人じゃ」
唇を尖らせる浦風に、私も心持ち強い調子で返す。
「大人はずるいんだよ」
「怒りん坊じゃけぇ」
「怒っているわけではないんだよ」
「本当？」
「本当だよ」
「嘘臭いのぅ……」
浦風に詮索されるのを打ち切るように言う。
「火の番、頼んだよ」

「じゃ、炬燵よろしゅうね！」
「炬燵？」
「もう炬燵の時期じゃけえ……暖が欲しいんじゃ」
廊下に立つ浦風の細い身体は夜風を受ける度に凍えているようだった。食事を作ってくれた彼女の好意を無下にするのはあまりに失礼であろう。
「用意しておくよ」
「センセは良い子じゃのぅ」
浦風はすぐに笑顔になって、台所に向かう。軽い足取りで、廊下の向こうから鼻歌すら聞こえている。私はその間、浦風に言われた通り、炬燵の準備に取り掛かっていた。押入れの空いた所に書籍を適当にしまい、炬燵が広げられる空間を作る。狭い書斎が、一段と狭くなった。寝転ぶことができるが、気をつけないと書籍の山に頭や手足をぶつけてしまうことだろう。
白い割烹着をまとったの浦風が晩御飯と共に書斎に戻ってきたのは、それから少し経った

頃だった。白ご飯も大きな南瓜の煮付けも具の少ない味噌汁も湯気が立ち、鼻先をくすぐる。冷え込んでいた書斎が、すぐに暖かくなった。煎茶も熱い。舌先を火傷した。配膳を終えた浦風は猫のように炬燵に飛び込み、柔らかく笑う。浦風の足が、私の脛を押す。

南瓜に箸を通すと随分と簡単に二つに割れた。味の染みた南瓜だったが、明日にはもっと味が染み、ご飯が進むことだろう。

「明日が楽しみだねぇ……」

浦風も自分が作った物を食べながら静かに、そうじゃのぅ、と幸せそうに呟いた。

二　白衣（しろきぬ）

寒さを耐え抜いた庭の木々に蕾が膨らんでいた。梅である。今年はどのような色を見せるのであろうか。私は慣れ親しんだ書斎に腰を下ろし、ようやく一息ついた。

年の瀬も年明けも、やれどこの蕎麦を食べるやら、晴れ着はどうするか、どこに初詣に行くやら、里帰りやら、羽子板やら凧揚げやらと冬休みを満喫する浦風に手を引かれ続けた。息も絶え絶えの私を見て、運動しんとあかんよ、と言ったのは誰でもない浦風だった。

そんな浦風も今ではようやく疲れを覚えたのか、書斎の端で毛布にくるまり、丸くなっている。まだ幾分か冷たい陽の光を受け、微睡みの中にいるようだった。原稿の傍ら、時折、

「風邪、引くよ」

と優しく声をかけても、浦風は何も言わない。むしろ、私がいることで安心しきっているようにすら思える。小さな寝息が、書斎にこだまする。

書斎で眠りに落ち、体調を崩したことが何度もある。寝床はあるのだが、そこまで動く気力も体力もないことがよくある。押入れに布団や毛布がしまってあるのは、そういう時のためなのだが、出すのすら億劫になることがある。そのまま畳に寝転び、眠り、寒さで起きる。あるいは、浦風に頬を叩かれたり、叫ばれたりして起こされる。青い顔をした浦風に、涙ぐんだ様子で、センセ？　と訊かれたのは一度や二度ではない。その度に、そう簡単には死な

ないようになっているんだよ、と笑ってみせたが、そう笑うと浦風が余計と泣きそうになるので、最近では気をつけるよ、とだけ言っている。

そんな浦風も、こうして眠っている。私はそういう時、浦風のように眠りの妨げるようなことはしない。淡々と原稿用紙の内に世界を書くだけだ。時として広大な世界を描くこともあれば、時として箱庭のよう静かな世界を描くこともある。そうして、一つ、また一つと物語に幕を降ろす。浦風は数少ない観客のようだった。私の背を見守ることもあれば、時として横まで寄り添い、世界を覗き込むことだってある。自由気ままな観客。去年も一昨年も、そのまた前の年も、浦風はそこに居た。制服がセーラー服になったんじゃ、と喜んでいたのが随分最近にすら思える。

ずっと浦風がここに居ると思っているが、この書斎に足を運ぶこともなくなる。気まぐれな猫のように。明日、不意に訪れなくなることも有り得る。そうなった時、私は浦風を探しに行くのだろうか。きっと行かないことだろう。私は死ぬまでここで書き続ける。小説や評論や詩歌や随筆や紹介文や……沢山の文章を死ぬまで書き続ける。浦風すら、物語の一部に

落とし込むかもしれない。そういう一生を歩むようになっている。

しかし、浦風はそういう一生とは無縁である。

桜の花が開く頃、浦風は一つ学年を重ねる。岐路に立つ年頃になる。浦風はそんな先のことは、まだ考えていないだろう。この少女はこれから、どうする気なのだろうか。いずれの時か、共に台所に立つことがあった。浦風の手際の良さを見守っていた時、私が何の気もなしに

「家内みたいだねぇ」

と零した時、浦風はかつてないほど動揺したことがあった。その後、私が浦風の代わりに台所に立ち、二人分の簡単な食事を用意し、食卓はそのまま、結婚式の話になった。ウエディングドレスが着てみたいんじゃぁ、と浦風は赤い顔で言っていた。私のことも訊かれ、神前式を昔話を話した。それから、センセは大泣きしてスピーチどころではないじゃろう、と笑われたこともあった。浦風の思い描く式で、私はスピーチをする役目を担っているらしい。今もそんな子供のような夢を描いているのだろうか。白無垢を着るかウエディングドレスを

着るか、後数年経てば、どちらかに身を包んでもおかしくない。浦風はもう、そんなことを決めているのだろうか。

目覚めた浦風に、そんなことを訊いても座布団を投げられるだけだろうか。

「……センセ！」

と思っていると、浦風の大声が私の耳に響いた。書斎の端に目を遣っても、浦風の姿はない。目を凝らしてみるが浦風の姿がない。皺の増えた手で顔を探り、老眼鏡をかけていないことに気づいた。手を伸ばして探ってみると、指先に硬いフレームが触れた。もう少し、と腕を伸ばしてみたが指先は空を切った。と思えば、視界が明るくなり、私を覗き込む浦風の姿が見えた。その目は赤くなっているような気がする。

状況が読めない私に、浦風は形の良い両眉を眉間に寄せる。が、すぐに欠伸を零し、溜息を一つ。私も浦風も恥ずかしそうに一笑した。どうやら二人共、眠っていたようだ。

身体を起こし、原稿用紙に目を遣ると、夢の中では書けていた続きが一つも文字になっていなかった。代わりに、みみずが何匹も原稿用紙の内を這っている。

「夢を見ていたよ」
「うちもじゃけぇ」
「どんな夢だったんだい？」
「センセから先に話しんさい」
「じゃ、またの機会にしようか」
そう言って笑うと、夢の中で書いていた言葉を一つ、また一つと思い出しながら世界を描く。夢を思い出している私の背中に、浦風が声をかけてくる。
「センセは白無垢かウエディングドレスどっちがええ？」
夢のことを思い出し、手を止め、浦風の方へ身体を向けて真面目な調子で答える。
「神前式だったからね」
「じゃ、白無垢かのぅ？」
「私が決めることじゃないよ。お前と、お前と将来を共にする旦那さんと決めることだよ」
「難しいんじゃぁ」

「ゆっくり決めればいいよ」
「じゃが……」
「大丈夫だよ。お前が選んだ人はお前と共に生きてくれるから。そんな心配しなくていいんだよ」
浦風は目を逸し、小さく、それでええんじゃろうか……と呟いた。私は何と答えるべきか悩んだが、浦風の将来を思い、助言を送る。
「式が全てではないから。特別だけれど。もっと大事なのはそれから、だよ。お前とお前と共に歩む旦那さんにとって大事な日々になる。式の前と比べて、変わったことは多くないけれど……」
「年の功じゃねぇ」
浦風はそう言って、炬燵の電源を入れる。炬燵で丸くなる浦風に、忠告する。
「今度は寝ないようにね」
「センセも、じゃ」

「私は仕事をするから大丈夫だよ」
「さっきも聞いた言葉じゃのぅ」
私はそれから言葉を交わさず、黙々と仕事を続けた。庭の梅は、もう白い花を明らかにしていた。

三　背中（せなか）

「お花見に行きたいんじゃ」
浦風が書斎に姿を見せたかと思えば、そんなことを言いだした。
原稿も一段落し、友人諸氏の作品が掲載されている雑誌を読んでいる私に、そんなことを言った。木綿の着物に兵児帯を適当に締め、座布団を枕代わりにして横になっている私の姿を見て、浦風はそんなことを言った。

雑誌から視線を外し、障子の前から動かなさそうな浦風の姿を一瞥した。浦風は私の奥にある文机が綺麗に片付いているのを見ると、青い目に微かな驚きや動揺や戸惑いを走らせた。浦風はここに来るまで、障子に背を向け、静かに原稿と向き合っている私の姿を想像していたことだろう。そうして半ば強引に理由を添えて、私の腕を引っ張り外に出したことだろう。

私も、昨日一昨日まではそんな今日を想像していた。それがこうして寛ぐことに至ったのは、朝の間に書き上がったためである。一日のほとんどを原稿に充てない日は珍しい。そういう時も大事じゃけぇ、と浦風が言っていたような気がする。彼女の言い分は、凝り固まった石頭を柔らかくしてくれる。こうして浦風が足を運んでくれると、原稿が進むことが多い。誰とも会わず、話さず、一人で背中を丸め書き続けるのは、私が思っているよりも私自身を酷使しているのだろう。そういう時に、浦風が来てくれるのは良い気分転換になった。

普段のご褒美として、花見に連れて行ってもいいのかもしれない。

私は雑誌を文机に置き、窓を見上げた。梅と桜が視界一杯に広がる。白梅はもう零れ、細

い枝を露わにしているが、桜の方は円やか花を枝先に実らせ、薄い花びらの向こうに、麗らかな日を透けさせている。

街の方まで出れば、満開の桜で一杯だろう。沢山の観光客で溢れていることだろう。そんなことを想像すると途端に暗い気持ちに襲われる。

私は私が思っているよりも世間にその名と顔が知られているようで、愛読者に囲まれることや興味本位の他人に足を止められることが何度もあったからである。そうしていつしか日課にしていた散歩は早朝に限られ、原稿に追われるようになってからは出歩くことさえ少なくなった。

浦風の思う花見がどのような花見か分からないが、私と共にいれば花を見るのも難しいだろう。それに、私と浦風とではあまりに歩調が違う。浦風が人混みに紛れる可能性は有り得る。そうなると花見どころではない。

「……行く気かい？」

浦風の真意を確かめるように静かに問うと、浦風は意外そうな声を上げた。

「え？」
「こんな時に行くなのかい？」
もし、浦風がそれでも行きたいと答えるのならば、花見に行ってもいいだろう。私の悲観的な考えが、浦風の瞳に映ったのか、浦風も私の真意を確かめるように訊く。
「センセはどうじゃけぇ？」
「私はここで十分だよ」
即座に言い切ると、浦風は呆れ返ったような溜息をつき、荒々しい歩調で書斎に踏み込んでくる。近くにあった新聞を私の方へ投げると、
「なんでそう出不精なんじゃ……」
と嘆き、力なく頭を垂れ、座り込んだ。新聞には桜の開花情報が掲載されていた。
浦風に正直に話すか悩んだ。花見に行きたいか、と自問するとここからでも見られるため行きたいとは思わない。が、浦風と、と自問を続けると話は変わってくる。
その全てを浦風に伝えるには、あまりに浦風が幼かった。だから私は、彼女を突き放すよ

うな言葉を吐いた。
「私と花を見ても楽しめないよ」
「センセ！」
ほとんど悲鳴のような叫びが、浦風の喉から迸った。浦風は思いもよらない自身の大声に頬を紅潮させ、私はあまりの勢いに言葉を失った。浦風の目に薄く涙が溜まっているのを気づいたのはその直後だった。浦風も自らの異変に気づいたのか、新聞を奪い返し、隠すように顔を覆った。
私はすぐに自らの非に気づき、頭を下げた。
「済まないね、言葉が足りなかったよ」
「センセは何も分かってないんじゃ！」
「……ああ、そうだね」
「色々な人のことを書いても、全然！　全然じゃ！」
「……その通りだよ」

「センセは、センセは……！」

私がまだ実家に居た頃、浦風は何かあると私の部屋に来た。そうして部屋の隅で丸くなって本を読む。私が一言二言声をかける。そうすると、泣くのだ。行く所がなくここに来てしまったんじゃ、と浦風は告白した。私はそれ以上言葉をかけず、落ち着くまで待った。本を読んだり、雑誌の懸賞小説へ送る小説を書いたりして。そんな日々を二人して過ごしていた。浦風はよく泣く少女であった。そんな子がいつしか泣かなくなった。

育った、と勘違いしていた。浦風の背中はいつの間にか大きくなっていた。一つ、また一つと浦風も年を重ねていた。それでも、まだ年端のいかない少女である。

私は震える背中に語りかける。

「お前が知っているかは分からないけれど、私は作家としてそれなりに有名なんだよ。この顔も名も雑誌や新聞を通して、知られている。そんな私が、お前と花見に行ってしまえば、花見に限ったことじゃないよ、人の集まる所に行けば、注目の的になる。それにね、……私も歳をとったから歩くのが遅くなったんだよ」

「だから、家に……？」

「そうだよ。だから、庭のある家を建てた。小さい庭だけどね。注目を浴びるのは得意じゃない。でも、草木を愛でたい気持ちは今も残っている。水を遣ったり、土を入れ替えたり、良い運動にもなるんだよ」

顔を上げた裏風の頬には涙の跡があった。赤い目を私に向け、微笑もうとするがまだ胸のどこかに怒りが残っているのか、普段よりも険しい表情を作っている。

「センセはセンセなのに説明が下手じゃ……」

痛いところを突かれ、苦し紛れに笑う。少しずつ上手くなるしかない、と答えたが、浦風がそっぽを向くだけで何も言わなかった。

それから当然のことであるが、浦風の機嫌は終始悪かった。兄の家に、夜桜を見てから帰すと連絡を入れ、私達は書斎の窓から見える夜桜を見ていた。月の光を浴び、冷え冷えと輝く桜を。心地よい夜風が書斎を満たす。

桜の花が風に流され、浦風の髪に落ちた。浦風は恍惚とした表情を私に向けた。

「良い色じゃけぇ。センセもそう思うじゃろ？」
私は薄い羽織を肩に引っ掛け、時刻表の片手に、兄に改めて連絡を入れるかどうか悩みながら、浦風に生返事を送った。すると浦風は頬を膨らませ、髪に落ちてきた桜の花を庭へ返した。
「センセは風情っていうのを分かってないんじゃのぅ……」
「もっと歳をとってから言うことだよ」
「すぐ大人になるんじゃ」
「それまで待っておくよ」

四　褞袍（どてら）

寒さは厳しさを増し、窓の向こうで輝く陽の光に、夏のような眩しさは見られない。寂し

い光が、遅くに染まった紅葉に降り注いでいる。荒々しい風が紅葉を震わせたかと思うと、書斎に滑り込み、全身が震える。堪らず窓を閉ざし、温かい茶をすする。

冬の間羽織っていた褞袍はどこにしまったであろうか。押入れを探ってみると雑誌の端に畳んで置いてあった。外から中の綿に触れると、真新しいのか柔らかい。浦風が入れ直してくれたのだろう。

文芸誌の依頼も落ち着き、文机の傍らには返事を書けなかった葉書が積み重なっていた。

ここ数年、とある文芸誌から秋に関する随筆を幾つか頼まれる。食欲の秋、読書の秋、芸術の秋、行楽の秋……そういう秋に関するものを書いてほしい、と。一度依頼を受けてから好評だったらしく、とある評論家からは、氏の随筆は良い。筆致も小説の時と違い、落ち着いていて、変に固くならず、のびのびとしていて、と評されたこともあり、以降、毎年依頼されている。

他の原稿と比べて自信があり、僅かながら力を入れていることもあってか夏の暑さが落ち着いた頃に、この依頼原稿について考えるようになっている。去年や一昨年の雑誌を引っ張

り出し、どういうことを書いたのか確認し、同じ頃に原稿を掲載されている作家はどういうものを書いているのか。今年はどういうことを書こうか、という具合である。

資料確認や整理、今年の原稿の指針を明らかにした頃に、葉書を読む。葉書は全国各地から送られてきた。中には、あまりに遅い残暑見舞いが見えた。ホテルの一室に引きこもり、原稿を書き続けている苦悩の葉書も見える。

返事を書いていると、薄いマフラーをした浦風が訪れた。その耳は凩にでも合ったのか赤く痛々しい。挨拶もなしに、

「センセ、炬燵じゃ。炬燵の出番じゃ」

押入れを開ける。温かいものでも飲むかい、という私の言葉は彼女の耳には届かなかった。押入れに炬燵の影はない。小首を傾げ、浦風は乞うように私を見る。

返事を書く手を止め、炬燵をどこにしまったのか思い出そうとするが、思い出せない。去年出した記憶があるのだが、どこにしまっただろうか。書斎で使う物は書斎にしまっているのだが、それがないとなると居間だろうか。新聞社等々からの献本がしまえなくなり、炬燵

を居間に移したのだろうか。

「お前、炬燵はどこに？」

浦風は暖を求めるように側に寄ってくる。書いているのが葉書だと分かると、覗かないように僅かに離れた。

「うちはセンセの奥さんとは違うんじゃが？」

「去年は？」

「出したよ」

「しまった？」

「センセ、しまってなかったかのぅ……？」

「私かい？」

「なんか、しまった後に出してなかったかのぅ……？」

浦風も記憶が定かではないのか言い淀む。しかし、浦風にそう言われるとそんな気がする。この家の物を動かすのは私か浦風のどちらかだ。どちらかが出し、どちらかが片づける。そ

んな習慣。寒暖に関する物は、浦風が出し、私がしまうことが多い。という習慣を思い出すと、やはり私がどこかにしまったのだろうか。

「ちょっと探してくるよ」

浦風に褞袍を掛け、私は書斎を離れた。返事のない浦風に、身体を冷やさないように、と言い残したが、やはり返事はない。普段ならば、うちも手伝うじゃけぇ、と追ってくるのだが。

炬燵は居間に置いてあった。火鉢も縁側近くに寄せて置いてある。台所や居間が寒いと、分厚い靴下を履いた浦風が言っていた。それで試しに、と居間に炬燵や火鉢を置いてみたのである。それから、そのままにしていたのだった。

書斎に戻り、浦風にそのことを伝えると、短い返事が返ってきた。冷えるのか褞袍の内で小さくなっている。

「炬燵、持ってこようか？」

「もうちょっと温まってから……」

浦風がそう言ったので、炬燵はもう少ししてから持ってくることにした。

五　雨（あめ）

「やまんねぇ」
「やまないね」
「明日も？」
「みたいだね」
「靴も靴下も濡れて困るんじゃ」
「雨靴は？」
「かわいいのがないんじゃ……」
浦風は白い足で、私の浴衣の裾を弄ぶ。柔らかい親指が、腰の辺りをつつく。
規則的な雨音だけが、書斎に落ちてくる。

雨は決して急に降る予報はなかった。連日の雨。梅雨。玄関に置かれた赤い傘が見慣れるようになったのは、ここ数日のことだ。

浦風の下校の道中に、私の家が選ばれるようになったのは、浦風本人も言ったようにローファーも靴下も濡れてしまったためだ。玄関で靴下を脱ぎ、風呂で足を払い、洗濯をする。真新しい白いブラウスとスカート、そして素足で書斎に訪れ、私の衣類もついでに洗濯しておいたことを教えられた時は大いに驚いた。レインコートや雨靴を用意した方が良いのではないか、と何度も言っているのだが、答えは先の通り一辺倒だ。

雨がやむまで、浦風はここに居るのだろうか。この時分は、原稿に集中できるため好んでいる。雨音が頭の中でも流れ、その流れに余計な考えが排出され、原稿の内に必要な言葉だけが残される。そんな感覚に満たされ、筆が早くなる。

集中力も増し、浦風のことすら頭の中から流れ落ちる。一枚、また一枚と原稿を書き進められる。額に浮かんだ汗が、原稿の上に一つ、また一つと落ちる。

無心になって原稿を書いていた時、世界から音が消え、我に返った。あれほど規則的に降

り続けていた雨は、どうやらやんだようだ。窓にしがみつき空を見上げると、まだ暗い雲が一面に広がっている。まだ降る気配がある。頬に濃い笑みを浮かべ、続きに取り掛かる。が、先の集中力は雨音と共に、書斎から零れ落ちたようだ。

「センセ、どうしたんじゃ？」

浦風の不安げな声に、私は無言で原稿用紙の束を差し出した。浦風は驚いたように目を瞠る。

「少し、読んでみてほしい……」

まだ居るのだろう、という続きを飲み込んだ。晴れ間である今帰らなければ、浦風が帰るのはもっと遅くなる。

浦風に続きを問われ、私は正直に答えた。

「センセ？」

「まだ居るんだろう？　そう長くないから」

「うちが読んでええんじゃろうか？」

私が頷くと浦風は姿勢を正し、読み始める。輝いた目で一文一文を追い、嬉しそうに物語に触れる。

今回の小説は、私の知人が社を立ち上げた雑誌の創刊号に掲載される小説である。少女が読めるような小説が多くなく、少女達も一人の読者として開かれるべきだ、知人はそんなことを言っていた。だから、浦風が読んで、引っ掛かりがなければ、少女も読める小説、ということになる。もし浦風が両眉を寄せ、訝しむようなことがあれば、この小説は少女が読むに値しない小説である、ということだ。

草臥れた精神を癒やすように、文机の抽斗に入っていた煙草を吸おうとしたが、封を切ったのは梅雨入り前であり、湿気って吸えない。浦風が読み終わるまでの間、じっと待っていた。原稿用紙を捲る音だけが、書斎を流れる。

それから、浦風は感慨深い面持ちで、

「面白かった……続きは？」

と呟いた。

その頃になると、雨は再び降り始めていた。
「これから書くよ」
「やむまで居ててもええじゃろか？」
「いいよ」
浦風の弾んだ声に、私はそう呟くだけだった。

六　葉書（はがき）

梅雨が明けた頃、文机は暑中見舞いで一杯になる。友人諸氏のみならず、出版社や新聞社からも送られてくるので、誰に返事を送ったのかどうか、という確認等々で真昼を迎える。梅雨の時分に最も原稿が進む私は、彼等の葉書でようやく現実へと帰ってくる。そうして私は昨年と同じように、今年も梅雨の間は原稿を書いており、と序文に置き、本文をまとめ、今年の夏も体調を崩さないようにと、と結ぶ頃には、障子の向こうから差し込んでくる陽射

しは、真昼の頃と比べると幾らか和らいでいるのだった。

梅雨の時分に体調を崩した葉書、本を駄目にした葉書、旅行に出かけている葉書、避暑地で寛いでいる葉書、連載小説のことや原稿依頼……。私はそれら一つ一つに返事を書く。時折、手を止め、団扇で仰いだり、冷たい麦茶で喉を潤しながら。

そうして返事を書いていると、汗だくの浦風が、

「……暑い」

と呻いて、書斎に倒れ込んだ。

「大丈夫かい？」

手に持っていた団扇で仰ぎ、残っていた麦茶を手渡す。白い項に汗が流れ、後髪が何本も肌に張り付いている。半袖のセーラー服だと随分涼しそうに思えるのだが、外だとそうもいかないらしい。白い肌は少し前と比べると仄かに赤くなっている。夏が終わった頃、少し黒くなっているかもしれない。

「夏は嫌じゃ……」

「私も好きじゃないよ」
浦風の細い身体はどうやら夏も冬も越すのは難しいらしい。私の家系の女達は、そうなっているのだろう。男も、兄以外は堂々としておらず、線の細い者ばかりだ。
「センセも外に出てみたら、ええんじゃ……」
「お前、夏休みはどうするんだい？」
「どう？」
「出かける、とか？」
「センセ、話し聞いとったかのぅ？」
「聞いていたよ。電車でも使えばいいじゃないか？」
「センセみたいにお金持ちじゃないんじゃ、うちは」
浦風が睨むように顔を上げる。浦風の家と私の家は遠くなく、電車で数駅、歩いて来れる距離だ。
この夏は一人で書斎に引きこもって原稿というわけだろう。外に出るのは精々、浦風の家

に顔を出すぐらいだろう。

ゆっくりと団扇で仰いでいると、浦風は我慢できなくなったのか、団扇を奪った。台所の冷蔵庫から新しいコップと麦茶を持ってきて、文机のお盆に置くと、暑中見舞いの返事を書きはじめた。浦風は横になったまま、適当に雑誌を読んでいる。

「制服、皺になるよ」

「ぼちぼち夏休みじゃけぇ、気にせんの」

「いいのかい、それで」

「ええんじゃ、別に」

浦風の調子はどこか刺々しい。私はもう一度台所に向かい、冷凍庫を覗いた。アイスが一本あった。

「これでもお食べ」

雑誌から視線を外した浦風はアイスを見ると目を輝かせて、私の手からアイスを奪った。一口かじると、笑顔になる。

「美味しい……。センセ、好きなんじゃ」

浦風を仰ぐ団扇の優しい風を受けながら、私は友人諸氏へ送る暑中見舞いを書いていた。夏休みになると、浦風は夏休みの宿題を私の書斎ですることになった。この夏の間、冷凍庫にはアイスが常備されるようになった。

七　指先（ゆびさき）

庭の紅葉が落ち、落ち葉拾いも終えた頃、万年筆を握る手が悴（かじか）むようになった。小さな火鉢で指先を暖めながら原稿用紙に向かうが、指先はすぐに冷たくなってしまう。

溜息を零すと、それまで私の様子を見守っていた浦風が声をかけてくる。

「センセ、ウチが代わりに書いたるけえね」

浦風は万年筆を渡すように両手を広げる。今後の予定を思い出しながら、今日一日ぐらいならば浦風に手伝ってもらってもいいだろう。指先に触れた浦風の柔らかい掌は、私の指よ

りずっと温かった。
「こっちに座って書くといいよ」
私と浦風は席を代わった。こうして浦風の背中を見守ることになるとは思いもしなかった。
「そう力を加える必要なんてないからね。倒してもインクは出るから、ゆっくり」
私の助言を聞き、浦風は姿勢を正したが、すぐに丸い肩が驚いたように微かに上下した。
すぐに私の方を振り向いた。
「あっ！　センセ！　インクが」
私は微笑を零し、穏やかな調子で伝える。
「インクは沢山出ても大丈夫だから」
「慣れんのじゃ……」
「鉛筆もあるよ」
「今日はセンセの代わりだから、これで書く」
私の使っている万年筆は、普通の万年筆より少し重い。寝かして書いた時に書きやすいよ

うに、選んだのだ。筆を扱うのと同じような調子で選んだのである。

火鉢で指先や掌を暖めながら、意気込み十分な浦風の背中に声をかける。

「休憩も大事だから、程々にね」

返事はなく、浦風は準備が整ったのか、指一つ動かさず私の言葉を待っている。

私は原稿用紙の続きを諳んじる。私の書く一文は長く、息の長い文章となっている。喋るように書けばいいから、という師の言葉を、師亡き後も守っている。

幾つかの文章を諳んじていた頃、浦風から切羽詰まった声が上がった。

「センセ、ちょっと待って！」

「何か分からないところでもあった？」

「早くて書けんのじゃ。もう少しゆっくりのぉ……」

「そう？」

「そうじゃ」

浦風肩越しに原稿用紙を覗くと、私の字のすぐ下に丸い字が見える。最初の数文字はその

丸い字が続いていたが、行が跨ぐと沢山のインクで潰れた文字が見え、そこから先は文字というより線や記号が続いていた。辛うじて、句読点が打ってあるのは判別できた。

浦風の白い頬が微かに赤く染まっていた。私はなるべく彼女の心を傷つけないように、優しく問いかける。

「お前、喋るのは苦手かい？」

「どういうこと？」

「これは私の師の言葉なんだけどね。原稿は喋るように書くのが一番なんだよ。書く時も喋る時も一定の調子で。そうすると焦らず、慌てず、落ち着いた調子で書ける」

「本当？」

「何もゆっくり喋るのが悪いというわけではないんだよ。ゆっくり喋った方が、聞き間違えとか起きないだろう？　だから、本当ならゆっくり喋った方がいいし、ゆっくり書いた方がいいんだよ」

浦風は赤くなった頬を隠すように笑った。

「それじゃ、センセは凄いんじゃのぅ。そんだけ早く喋ってもよく伝わる」
「これで生きているからね」
浦風は万年筆に蓋をして、そのまま火鉢へ向かう。
「うちがそこに座るのはあかんね」
「書きたいことがあれば書けばいいよ」
「うちは喋るだけで精一杯じゃ」
「そうかい」
私は文机の前に戻らず、火鉢の方へ戻った。
「休憩も大事だからね」
「そんな休憩してええの？」
「良いんだよ。浦風が頑張ってくれたから」
「別にうちは何も……」
「それを決めるのは私だよ」

私と浦風は小さな書斎で、更に小さくなり、火鉢の温もりを分け合った。

八　烏賊（いか）

「これは……？」

新聞社に原稿を渡し、書斎に戻って驚いた。買ってきた烏賊は、まだ冷蔵庫の中にしまっていない。

浦風が部屋の片隅で、紙くずとなっていた原稿用紙を広げ、読んでいた。私が帰ったことに気づかないほどに。

原稿を書き上げ、新聞社に行く用意をしようと和装から洋装に着替えている時、浦風がやってきた。麻生地にするか綿生地にするか悩んでいたが、セーラー服の上に薄いカーディガンを羽織っている浦風の頬は、微かに火照っているように見える。

「外、どうだった？」

「ええ感じじゃ」

梅雨が明け、入道雲が窓の向こうにも見えるようになった。食卓や文机にも麦茶が置かれるようになり、氷の消化も先月と比べると早くなっているような気がする。

「私はこれから出かけるから、留守番、頼んだよ」

「珍しいこともあるんじゃのぅ……」

「こればかりはね」

文机の上には、書き上がった原稿用紙の束が封筒の中にしまってある。

私が契約している新聞社に出勤の義務はない。何作かの小説を寄稿すればそれでいい。しかしあまりに顔を出さず原稿に集中していた梅雨の時、新聞社の者から葉書が来たり、家に様子を見に来ることがあった。小説家という者は自殺や旅行は付き物なので……と言われた。だから私は完成した原稿を郵送せず、生きているということを示すために新聞社に顔を出すようにした。

そういう場に浦風を連れて行くわけには行かず、浦風もそのことは分かっているのか、留

守番について何も言わない。
「センセ、何か食べたい物でもあるかのぅ？」
「食べたい物？」
「お祝いじゃけぇ」
「何か帰りに買ってくるよ」
そう言って、麻の洋装に着替え、私は家を出たのであった。
我に返った私は浦風に声をかけず、烏賊を冷やしに台所に向かった。戻ってきても、浦風は没原稿に夢中になっていた。彼女の傍らには何枚もの原稿用紙が積み重ねられている。それらの原稿用紙は丁寧に開かれ、皺を伸ばして何とか読めるようにしてあった。
浦風に何という言葉をかけるべきか分からなかった。同時に、胸の底の方からはっきりとした羞恥が湧き上がってきた。これは、一人の小説家としての羞恥であった。読者が触れられる原稿は新聞や雑誌に掲載された原稿であり、単行本として出版された書籍である。書き手が、これならば読者に読んでもらってもいいだろうと判断し、読者に届けられている。そ

の一つの話に、どれほどの没原稿があろうとも、読者はそんなことを知る必要はないのである。

そうだというのに、浦風はそれらの原稿を拾い上げ、一字一句を追いかけている。

「浦風」

喉から飛び出した声は、私が思っていたよりも低く、低い声の内には恥の他にも怒りや悔いの響きも有していた。しかし、浦風にそれらの感情をぶつけるのはおかしなことである。没原稿の管理の責任は、私にあるのだから。浦風はそんな感情に晒される必要はない。

頬のあたりが熱くなったのは、恥ずかしさのせいである。

浦風は私の声でようやく現実に帰ってきた。書斎の片隅にまとめられた没原稿の山と私を見比べ、その顔は青白くなった。痛々しい沈黙が私達の間に広がる。

私は浦風に歩み寄り、足元に広がる原稿用紙を拾い上げ、努めて優しい声をかけた。その頬に恥ずかしそうな笑みを添えて。

「これは、年の瀬に苦労していた冒頭だよ。喋るように書けばいい、と恩師の言葉を思い出

していたけれど、喋るためには準備が必要なんだね。その準備をどうするべきか考えていたところなんだよ」

いつものように文机の前に腰を下ろし、一枚の原稿用紙の話を終えると、破り、屑籠に押し込んだ。それから、また一枚、また一枚と過去を振り返る。

怒られると思い肩を寄せ、身体を強張らさせていた浦風は私の言葉を受け、赤くなった膝を動かし、次第に近づいてくる。

没原稿は、自分が納得できる表現が見付からず、ひとまずこの表現を置いておいて続きを書こうとし、結局その仮置きした表現が胸の内で引っかかり、没にした、というものばかりだった。

そういう話を続けていた時、浦風から疑問が飛んできた。

「何で、そんなになっても書くんじゃ？」

「そんなに？」

「そんなに悩んで、苦しんで、なんで書くんじゃ？　センセじゃったら、他のこともできる

じゃろ？」
「他のことって例えば？」
「学校のセンセとか？」
浦風の言葉に、私は思わず一笑した。そういう未来も有り得ただろうね、と言い、それでも、と続けた。
「それでも、私は教壇に立つ傍らで書き続けたと思うよ」
「なんでじゃ？」
「書くのが好きだからね」
それから私達の腹の虫は同時に鳴り、浦風は恥ずかしそうに顔を赤らめ台所に向かう。その背中を追いかけると、露骨に不満気な顔を向ける。
「センセは待っといたらええんよ……？　どうせ烏賊じゃろぉ？」
「さばけるのかい？」
「練習したんよ」

「じゃ、頼んだよ。烏賊そうめんの気分なんだ」
「好きじゃのぅ」
「色が良いよ。この時期に似合って涼し気だし」
そう言って、書斎に戻り原稿用紙を片付け、一息ついていると台所の方から短い悲鳴が上がった。布巾を片手に台所に向かうと、浦風は手を真っ黒にしていた。指先から滴った墨が割烹着も流しもまな板も黒くしている。浦風は乾いた笑みを浮かべた。
「センセみたいじゃのぅ……」
「そこまで黒くしないよ……」

〈了〉

四畳半の二十四節気

発行　2018 年 6 月 17 日　初版

原作　艦隊これくしょん (DMM ゲームス&角川ゲームス)

印刷 : 出藍文庫印刷所
発行者 : 近藤貴弥（出藍文庫）
連絡先 : stkk7.920521@gmail.com

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。